＊＊　巻頭言　＊＊

オリンピック後の道標 SDGs と工技研の貢献

Contribution of RIIT to SDGs after Olympic Games

副学長・学術研究推進センター長（国際学部　国際地域学科　教授）　北脇秀敏

2020 年は東京オリンピック・パラリンピック競技大会（東京 2020 大会）が開催される年である。競技場の設計やマラソンコースなど迷走してきた面も多いが、国家的な目標として機能してきたことは事実である。本学でも夏期に開催される大会における暑熱対策や和製カヌー、女性アスリート支援など選手の活躍につながるさまざまな研究を支援し、競技への貢献を目指してきた。しかし大会が近づき準備が一段落してくると、大会後の新たな目標が注目されるようになってきた。ゴールのないレースでは奮闘する動機が薄れる。大きな山を越えた後に失速せず、モチベーションを維持できるような将来のゴールが必要とされている。

それではオリンピックの次の目標は何だろうか。大きなことを成し遂げるための計画は Decade（10 年間）の単位で策定されることが多いが、2020 年（東京 2020 大会）から 10 年後の 2030 年は奇しくも持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals:SDGs）の目標年次である。極めてわかりやすい理屈であるが、東京 2020 大会の次の 10 年間の日本は SDGs の実現をかけ声に発展の維持を目指して行くのではないだろうか。実際、東京都を始めとする多くの公共団体ではすでに SDGs に関するプロジェクトをスタートさせており、大学でも東京大学を始め多くが SDGs 実現のための活動を前面に出している。本学がエントリーしている THE 世界大学ランキングにおいても SDGs に注力している大学ランキングを始めており、本学も参加する予定である。このように東京 2020 大会後のシンボルとも言える SDGs を目指して日本中が舵を切る中、東洋本学でも大学が目指す研究分野の強化策である「重点研究」において SDGs に関する研究を 2019 年度から支援している。

SDGs は途上国開発を主目的として実施されてきた MGDs とは異なり、われわれの身の回りのほぼ全てのことを目標に包含しているため、当初は総花的ではないかとの消極的なコメントもあった。しかし「誰も取り残されない」というコンセプトが功を奏し、今では世界的に広く受け入れられている。このことを本学に当てはめると、あらゆる学問分野や研究所にとって活動を発展させる大きなチャンスが得られたということになる。産学連携の本学の拠点である工業技術研究所は、SDGs の「No.9 産業と技術革新の基盤をつくろう」を活動の核として、他の全てのゴールにも関係した活動を実施する潜在力を持っている。大学の使命は大きく分けて教育、研究、社会貢献とされるが、工技研は研究成果の社会実装という「社会貢献」の面から大きな原動力となろう。工技研には「産学連携で地域活性化を目指す」という大きな目標があるが、これを堅持した上で SDGs の実現を目指すという上位目標にも大いに貢献してほしい。これが「地球規模で考え、行動は足元から」という古くて新しい世界のスローガンにもつながる。

東洋大学の東京 2020 大会後の将来を俯瞰して、目標を持って活動するためには、今後の道標となるいくつかの節目が必要であろう。これをマラソンのレースに例えると、今年 2020 年がスタートであり、SDGs の目標年次である 2030 年が折り返し地点で、本学の 150 周年の 2037 年がゴールとなるのではないだろうか。すなわち”TOYO SDGs Global 2020-2030-2037”という SDGs の目標年次を中心とした大学発展のシナリオが見えてくる。工業技術研究所がそのシナリオの実現に向けて重要な役割を担うであろうことを確信している。